

自己超越の類型

北 畠 知 量

はじめに

自我は、既に幼児期において自らを認知し、思春期になると、そのことを更に認知（メタ認知）する。それ故に自我は、自分が存在するというこの意味・価値・目的を自らに問わざるを得ない。この問いへの答えが、自我同一性（アイデンティティー）の中身となる。

このような問いを意識しない限り、自我は一応安定・充足している。しかし、これを意識しない人はまれであり、意識した以上、その問いは、生涯を通じて幾度も反芻される。これに、より高次の答えを出すことによって、自我は個性的な発達をとげていく。

ところが、危機に陥ったアイデンティティーを再建する展望が閉ざされたり、それを確立すること自体が無意味に思えたり、あるいは自我そのものに死の宣告がなされたりするような場合に、自我はこれまでの自分から離れて、異質な精神空間への飛躍を企てることがある。これが自己超越である。これを成し遂げて誕生した新たな主体は、従来の自我を放棄することができる。従来の自我と、新たな主体との間に、価値の落差が生じるのだ。

本稿においては（超越と発達の原理的關係の解明という課題を展望しつつ）、このような自己超越の全体を類型的に把握しようとした試みが概観される。

[1] 日本思想史の視点から見た自己超越

武田清子は、論文「自己超越の発想」において、近代日本人は何を対象とし何を契機として自分を超えようとしたかを考察し、「物」による自己超越、「人」による自己超越、「神」による自己超越という三類型を見出した¹。以下これを簡略化し、表にして示そう。

	特 徴	具 体 例
物による自己超越	「物」=「自然」に属する外の権威（例えば偶像や、国家や、唯物史観などの価値対象）に献身し、自己否定・自己没却することによってなされる自己超越。 これらの超越は擬似的であり、右に示す A・B に主体確立の可能性はない。	A 偶像崇拜（精霊信仰、仏壇崇拝、氏神崇拝など）による自己没却の自己超越。 B 宗教的国家観（例：天皇制）ないし社会有機体論的国家観に自己を没入することによる自己超越。 C 唯物史観（史観を媒介とする自己超越で、キリスト教の終末観と一面で共通する）による自己超越
人による自己超越	自らのものの考え方、修養、悟りなどといった「何らかの主體的・心理的操作」を契機としてなされる自己超越。 この場合、自己保存あるいは自我確立が真の目的であって、自己の絶対的放棄・超越が目されているわけではない。だからこれらは、相対的自己超越・自己無放棄の自己超越とも呼びうる。	A 多元主義的価値観（人はそれぞれだ）や何物にもとらわれない無執着の立場に立つことによる自己超越。 B 諦観：諦めの人生観による自己超越 (1) 美的、宗教的自然観（例：西行）による (2) 福沢諭吉：「人間＝蛆虫観」による (3) 夏目漱石：「則天去私」による (4) 森鷗外：「諦念」＝傍観者の意識 C 合理主義—ヒューマニズム。自らをこれで律することによって、自己を超える。
神による自己超越	自己存在の究極的意味を自己の内部に見出すことができないという認識に立っている。 他律でも自律でもない神律的自己超越。神は人間の自律性に意味を与えるものとなる。	典型的にはキリスト教の神、もしくは普遍的絶対者による絶対的自己超越。 「親鸞や道元における信仰もそうであろう」とされている。

自己超越の類型

ここに示された自己超越の三類型は、次のような理解が基本前提となっている。すなわち、日本人は、自我崩壊の危機に直面すると、自我の主体的自覚のレベルに応じて「物」「人」「神」による自己超越を試みてきたが、それらはそれぞれ擬似的、相対的、絶対的自己超越と呼びうるという理解である。これを図式化して言うと、「主体確立のレベル＝ある対象・契機による自己超越＝自己超越のレベル」ということになる。

だが、「物」（例えば、唯物史観）による自己超越であっても、小林多喜二のように、最後まで節を曲げなかった者もいれば、早々に転向を表明した者もいる。「神」による自己超越であっても、殉教した者から棄教した転び切支丹（パテレン）の例まで幅広い。これを考えると、超越の一貫性、徹底性、持続性などといった視点から、自己超越を類型化する可能性がでてくる。

また武田の類型の場合、自己超越は、自己の外への超越であったわけだが、竹内良知は次のような指摘をしている

「明治二〇年いらい、日本の市民文化は、自己の実現を内面的な〈超越〉に求める観念的な方向をとり、ロマン主義的な性格をおびるようになっていった。この方向は、北村透谷において先駆的に、しかも典型的に表現されたが、西田（幾多郎）がたどったのも同じ方向であった²」

これを受けて竹内整一は、この「内部への超越」の最も過激な思想家として、清沢満之や綱島梁川が上げられると指摘する³。

満之の場合の自己超越とは、「小我＝有限者＝相対有限の境地に落在せるもの＝現実の自己」から「絶対無限（如来）の働きに発揚せしめられた真の自己」への超越である。この超越を試みようとするとき、その目標となる「真の自己」とは何なのかが問われることになる。それが「自己とは何ぞや、是れ人生の根本問題なり⁴」という問いに他ならない。この超越は、他力によってなされる超越ではあるが、これを有限者自身の行為としてみた場合は、有限者が自らを「関係的自己」でしかないと徹底認識する

ことによって果たされるものとされている。

梁川の場合の自己超越とは、内面深化による主観性の打破という基本性格のものとなる。梁川は、当時の青年達に見られた「煩悶」を「自己が自己以上のものになろうとする現象である」とおさえ、それは「自己が自己の主観性を内面的に深化させる道」なのだと理解した上で「自己の個別・主観性をそれ自身内面的に深化・徹底させることによって、それ自身をも超えて出て、そこに普遍的・客観的何物かとしての神へと合一を感得すること」が自己超越であると主張する。この場合の神とは、「外」在のそれではなく、個的自己「内部」においてのみ、「自悟自照」しうるものとされている⁵。

このような自己超越は、ユングの言葉で言えば、自我がセルフを目指して企てる超越ということになるだろう。

〔2〕宗教的自己超越：親鸞の類型

日本における超越を類型化した先駆的な例として、親鸞きょうそうの教相判釈はんしやくである「二双四重にそうしじゅうの教判」をあげることができる⁶。これは、日本仏教全体の判釈（分類・類型化）であるが、同時にそれは、自己超越の類型として読み直すことができる。

親鸞は「生死出ずべき道」を仏教に訊ね求めた。仏教の本道は、自力修行による自我の克服である。けれどもこれは至難の業である。若き親鸞は、叡山で、自力修行によって自我を克服しよう（堅超）としたが果たせなかった。

彼は、吉水に住んでいた法然のもとに通い、念仏の教えにふれる。それは、自我を克服・完成させる道ではなく、自我を横様に超える自己超越の道であった。先に叡山を降りていた法然は、善導の一句にふれて自我を超えた先駆者であった。その法然の感化により、親鸞は超越の本道を確信す

自己超越の類型

る（親鸞 29 歳）。そのことを親鸞は、「雑行を棄てて本願に帰す⁷」と記しているが、それは「よきひと（法然）のおおせをかぶり（蒙^{かぶ}り）て信ずる⁸」ことによって可能であった。

後に仏教全体を見渡した親鸞は、自我の超え方に関して、「豎／横」=（自我そのものの克服を目指す／自我の傍らに立って自我を傍観するような超え方をする）、「超／出」=（自我を一挙に超える／段階的に順を踏んでこえる）という視点を設け、そのような視点を 2 つずつ組み合わせて仏教全体を 4 つに分類した⁹。

大 乗 仏 教	とんぎょう 頓教 (一挙に自我を超える)	しゅちょう 豎超	真言、法華、華嚴、禪
		おうちょう 横超	浄土真宗
	ぜんぎょう 漸教 (段階的に自我を超える)	しゅしゅつ 豎出	法相
		おうしゅつ 横出	浄土

親鸞は、法然の示した横出の道を、更に横超（絶対他力）へと徹底した。では、横超とは何だろうか。親鸞は言う。

「横超」とは、本願を憶念して自力の心を離れる、これを「横超他力」と名づくるなり。これすなわち専のなかの専、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり¹⁰。

横超の骨子は、本願を憶念することによって「自力の心を離れる」ということである。ここで重要なのは、「離れる」という言葉だ。

自力の心とは、我が身・心・力・様々の善根を頼むということである¹¹。悟りを得ようとする際に、この自力の心を頼まず、これを離れるとは、自我が、それらを拠り所としないということになる。このことは、自我を否定し放棄することと解することができそうであるが、そうは言わずに、離れるとしている。これは、自力の心を有する自我と、これを手放した自分

が共に存在していて、前者から後者へと立場・視座が移ったことを意味している。それは、前者として生きてきたものが、後者として生きる目を開くという事態である。つまり、従来の自我の中から新しい自分が出離した結果、その自分が、どこまでも煩惱具足のままである従来の自我を「いたずらもの」として見定めることができるということである。要するにそれは、自力の心を持った自我という母体から、母体の有様を、丸ごとメタ認知¹²しうる新しい自分が誕生し、しかもそこに、喜びの感情と、得心したという感覚と、自分にはこれしかないという確信が伴うという事態なのである。

横超の要は、自我をまるごとメタ認知しうる眼をもった自分の誕生という点にある。親鸞は、この眼を「信心」と押さえ、それをさらに「信心の知恵」と言い換える。そして、このような知恵^{たね}の種が、自我の深層に「信心の業識」として秘められていると言う。

能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらずは光明土に到ることなし。真実信心の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す¹³。

「能所の因縁」とは、父母のこと。父と母が和合すれば、子供が生まれる。だから父母は、子供の因と縁である。だが、子供が子供として生まれるためには、子供となる元のものがあった。これが内因である。そう見れば、父母は外なる縁（外縁）でしかない。真実の信心もまた、このようなものだと言親鸞は言う。信心の元は、「信心の業識」と呼ばれる。要するに親鸞は、自我が自らの執着心を破る光明・名号という外縁に遇ったとき、自我の内奥にある「信心の業識」から、信心という知恵をもった新しい自分が、自我の殻を破って発現するというのである。そのために我々ができることは、弥陀の本願を憶念することだけである。そうすれば自然に、瞬

時に、正定聚の位につける。これが親鸞の言う横超＝自己超越なのだ。

親鸞の横超に際して重要なことは、二双四重の合理性でも、横超の優劣でも、また以上に述べたような理論的解釈でもない。重要なのは、(1)自分の無力・罪惡・劣等性の自覚であり、(2)私が、この自我を超えたいと望むこと、つまり本人の機が熟しているということであり、(3)よき先達者の示唆があるということであろう。

親鸞は、自我の罪惡性に苦しみつつ横超を繰り返し、自我を生きながら、自我を超えた世界に生かされて在ることを喜ぶ一生を送った。それを可能にするのは、他力の本願だと親鸞はいう。自我は、どこまでいっても冥利を求める迷いの中にあり、自らの力で自らを救うことはできないのである。

[3] トランスパーソナル心理学における自己超越

仏教で扱うのは、大人の自己超越のみである。全年齢を射程に収めた自己超越ということになると、トランスパーソナル心理学が注目されるだろう。

アメリカで、1969年、マズロー A、スティッチ A、グロフ S らによって、トランスパーソナル心理学が提唱され、今日に到っている。

従来の西洋の心理学では、新生児の自他未分化な自我状態から自我が確立されるまでが、つまりプレパーソナルからパーソナルまでが心の発達であるとみなされていた。だが、トランスパーソナル心理学は、このパーソナルな限界を超えてトランスパーソナルな領域に踏み入り、意識の発達の究極（アートマン）までを射程に収めようとする。

その前半の過程は、バスカーリアの作品に即して言えば、大木に芽吹いた新芽に例えられるだろう。新芽は幾段階にも渡って自分を越えて大きくなり、一人前の葉っぱとなる。その後半は、冬枯れた葉っぱが、自分とい

うものの限界を超越し、「自分は大木（いのち）の一部なのだ」ということに気づく過程に相当する。さらに、葉っぱはやがて落ち葉となり、朽ち果てて、樹の栄養分になり、再び樹に取り込まれていく過程がひそかに進行していく。

トランスパーソナル心理学の代表的理論家である K ウィルバーによると、新生児の基底意識の中には、様々なレベルの深層構造が潜在的に存在しており、我々の意識はこれらを想起・再発見するような形で発達していく。意識は、各段階で常にアートマンを回復しようとするが、段階ごとに制約があるので、代用の統一で満足しようとする。だが、これに満足することに出来ない意識は、その段階のアイデンティティーを放棄しうるまでに強くなると、そのレベルから自分を切り離し、より高いレベルに移行（発達）する。この幾段階もの自己超越が、アートマンに到るまで続くことになる。

ウィルバーは、このような意識の自己超越を十二の段階に分けて説明している¹⁴。この壮大なプロジェクトの圧巻部分は、パーソナルからトランスパーソナルへの移行（超越）であろう。

パーソナルな意識においては、自分とは、皮膚で囲まれた肉体の中にあるところの心身（ペルソナ、影、自我と身体）であると感じられている。それゆえにこの自分は、自らの消滅（死）を恐れ、自他を区別している。この自分は、主体性の確立をめざし、人格の完成、自己実現（社会的自己実現）に励み、絶望感（自分の一生とは何だったのか）を意識しながら、何とか自分の生き方に満足することを最終目標としている。その姿は、我々にはなじみの深いものであり、ウィルバーはこれを、心身全体こそがわが身のすべてであると思い込んでいるケンタウロスになぞらえている。

トランスパーソナルな意識とは、このケンタウロスの段階を超えた次元であり、ここでは自他の区別が乗り越えられる。私は私の主人公であり、その私が生きているのだという認識が逆転し、大いなる命が主人公であり、

それが私となって生きているという認識が開ける。これを超えると、最終段階としてアートマンにいたる。

このような考えに立つと、自我の崩壊はむしろ自我のこだわりということになる。このこだわりを捨てれば、私は、自我と自我を超えた世界を自由に行き来することができる。これは、親鸞の横超に近い。けれども、この超越を可能にする行として、トランスパーソナル心理学は、様々な具体的手段を用いるのが興味深い。

[4] 自我の超越的発達

心理学は、子供における自我の発達に関して、様々な説明をしてきた。

かつてバーン.E は、フロイトの理論を基に、エゴグラムを考案した。エゴグラムは、自我を5つ (FC・AC・A・CP・NA) に分けて把握するが、この5つは、同時に発現するわけではない。子供の内にいる FC から先ず AC が分化し、更にこれを監視する A が生まれる。この全体を監視するために、子供は自らのうちに親の規範を取り込み、ここに CP と NP が形成されるという。この発達モデルは、最初に発現した自我と、これを凌駕するような新たな自我が次々と生じるという筋道が基本である。先に発現した自我を凌駕するという事態を超越と解するなら、これもまた超越的発達の一つのモデルということになる。

またスターン.D は、自己とは日常生活で体験される自己感だとしたうえで、誕生直後から次のような4つの領域の自己感 sense of self が次々に分化・出現してくると言う¹⁵。

1 新生自己感 emergent self: 誕生後から2ヶ月にかけて形成される。

生得的な知覚と、外界から得られる様々な体験とをすり合わせるところに出現してくる自己。これを基底として他の自己感覚が分化していくことになる。

- 2 中核自己感 core self：生後2-3ヶ月くらいから形成され始める自己感覚。自発性（自分の行為の主は自分だという自己発動性）、一貫性（自分の行為は境界があり、身体的に断片化していないという自己一貫性）、情動性（同じ体験をすると同じ感情を抱く）、連続性（自分変化するしながら自分としてある）などが発現し、母親とは異なる情動体験を有する自己という感覚が生まれてくる。
- 3 主観自己感 subjective self：生後7-9ヶ月ころに形成される自己感覚。自分だけではなく他人にも心があるということがわかり、感情・動機・意図などを相手と合わせようとする（情動調律 affect attunement の発動）自己の出現。
- 4 言語自己感 verbal self：言語的関わりあいの領域で15ヶ月ころから形成され始める自己感覚。私的自己と公的自己の形成。

誕生	2ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	2年
新生自己感				
	中核自己感			
		主観的自己感		
				言語自己感

4つの自己は、このような一定の順序で成立し、死ぬまで存続する。自己とはこのように、いくつかの局面をもち、それら局面が相互に影響し合いながら複合的構造的に発達していくと考えられている。

また認知心理学のナイサー・Uは、人が自分について知ることができる情報の種類（知覚する、想起する、経験する、感じる、思い浮かべる）に基づいて、5つの自己 self が段階的に出現すると想定した¹⁶。

- (1) 生態学的自己 ecological self：視覚、聴覚、内受容感覚などによる物理的環境の知覚に基づく自己で、乳児期のかなり早い時期から知覚可能である。

- (2) 対人的自己 interpersonal self：他者との社会的交渉にもとづく自己で、そのような社会的交渉は、人に典型的なコミュニケーションの信号や情動的なラポール（音声、アイコンタクト、身体接触など）により特定される。この自己知識のモードも乳児期の早い時期から想定される。
- (3) 概念的自己または自己概念 conceptual self：自分自身の特性に関する心的表象である。そうした表象は、個人個人で異なるように、分化面でも変わるが、おもに言語的な情報によって獲得されたものである。したがって2歳くらいからこうした自己を仮定できる。
- (4) 時間的拡大自己 temporally extended self：個人が知っており、語り、想起し、未来に映し出すような、その個人のライフストーリーであり、概念的自己を持つまでは出現しないとされる。ナイサーはその時期を4歳くらいだと考えている。
- (5) 私的自己 private self：子供が主観的な経験を理解し重んじるようになったとき、そして、他者とはそうした意識的経験を共有し得ないということの重要性に気づいたときに出現する自己である。

ナイサーやスターンが示したこのような自己の発現を、自己超越の局面として読み替えると、幼児期における自我の発達は、自我の自己超越という姿のものになる。けれどもこの場合の自己超越は、幼少期に固有のものであり、大人の場合の自己超越と太い論理でつながらない。

[5] 臨床場面における自己超越

臨床場面における自己超越には、それに先立つ助走の諸段階があり、あるとき一気に超越が成し遂げられる。その有様を、身近な関係者は、はっきりと見て取ることができる。以下に示すのは、臨床場面をもとに組み立てられた理論である。

【死にゆく過程のチャート】

かつて E・ロス は、癌の告知を受けた者は、例外なく衝撃を受け、(1)自分 は癌ではないと思いたい気持ちになり、やがて(2)怒り・不安・あせり・苛立ちに振り回されるようになり、やがて(3)取引の段階に移行して、(4)うつ状態になって死ぬが、まれに(5)死を受容する者がいることを指摘した¹⁷。この五段階では、(1)から(4)までの助走の後に、(5)への超越が想定されている。

当時、癌は、発見されたときはすでに手遅れであることが多かった。だからこの五段階もそれなりに説得力があり、これを修正・発展させたいいくつかのチャートが提出されたこともあった¹⁸。けれども今日では、癌が早期に発見され根治する確率が高くなったので、このチャートはほとんど役に立たなくなってしまった。何よりも、癌を宣告されたロス自身が「私の理論は、私に何の慰めももたらさなかった」¹⁹と語っていることが印象深い。

【医療現場】

病のために、失明、半身不随、言語障害などの後遺症が残り、社会復帰のためにトレーニングを必要とするような場合、当該患者の心境の変化には一定の共通性がある。岡本五十雄は、これに関して次のような五段階を指摘している²⁰。

- ・ショック期— 呆然自失しており、障害の存在に気づかず、不安もそれほど強くない時期
- ・否認期— 障害が残ると薄々分かってくるが、それを認められず、疾病や障害の否認が起こる
- ・混乱期— 現実を否定しきれず、かといって将来の見通しも立たずに苦悩し、悲しみや恨みなど、様々な感情が表面化する。この時期は看護婦や医師によく当たる。
- ・解決への努力期— 現実を冷静に見つめ、自分で努力していかなければな

らないことが分かり、新しい生活に対して建設的な努力をする。

- ・受容期—社会や家族の中で、何らかの新しい生きがいを得ていく。

岡本は、これに続けて、最後の段階である受容には、この五段階を何回も繰り返す「仮の受容」と、そのような苦悩を、それほど時間をかけずに受容する「本物の受容」があると指摘している。この五段階は、概ねロスが示したチャートと重なっている。勿論「努力期」から「本物の受容」の間に自己超越がある。

【対象喪失の心的過程】

乳幼児にとって母親は絶対的ともいえるくらい依存度の高い存在である。その母親から子供が無理やり引き離されると、乳幼児は立ち直れないほどの大ショックを受ける。これは猿の場合でも同様で、離れたままにしておくと、ミルクを与えても小猿はやがて死に到る。

ボウルビーは、このような対象喪失の事態から子供が立ち直っていく過程を次のような三段階として捉えた。

〔抗議〕 母を失ったことが信じられず、現実には激しく抗議する。失った母親を取り戻そうとしているかのような行動が展開される。

〔絶望〕 母親を取り戻すことが不可能だとわかると、失望し、絶望し、悲嘆の状態に陥る。無反応、夜尿、指しゃぶり、夜驚など、様々な身体症状が現れる。

〔離脱〕 しばらくすると母を忘れたかのような状態になり、母に替わる新しい養育者に依存するようになる。

絶望の最終段階から離脱に到る間に、子供は子供なりに心の大きな組み換えを行っている。それは明らかに助走と飛躍であり、子供の自己超越だといえる。

以上から考えて、臨床場面で観察される自己超越は、基本的には次のような三つの段階を経る。

【ステージ A】自分を襲った災難 X を引き受けられない。

X に直面した自我は、パニックを起こし、茫然自失する。その後
もしばらくは、X を認めず、これを引き受けられず、その何ともな
らない気持ちを様々な形で表明する。

【ステージ B】自我の納得

自我は、無理やり納得したり、割り切ったり、合理化したりして、
この X を何とか我が身に引き受ける。だがこれを引き受けたとして
も、完全に納得したわけではない。

【ステージ C】自我をこえる

幾人かの人々は、ステージ B を突き抜け、異なる次元のステージ C
へと飛躍する。C は、悩める自我そのものが超えられた境地であり、
吹っ切れる、受容する、諦観する、達観する、飄々・淡々・平然・超
然とする、悟る、救われる、執着を離れる、生かされる、などの言葉
で呼ばれてきた。

臨床現場からの報告では、B から C への超越は個々人にゆだねられ、た
だその現象が記述されるだけである。如何にしてこれを可能にすることが
できるかに関する理論はない。

〔6〕 死の受容に見る自己超越の類型

死が迫っていることを意識すると、人々は、それに対して全力で抵抗す
るのがふつうである。しかしその抵抗のあとで、淡々と、平然と、ユーモ
ラスに、常態で、謝念をもち、他者をいたわりながら死を受け入れる人々
がいる。これらの人々の言動に触れると、我々は鮮烈なインパクトを受け
る。次にその例をいくつか示そう。

*デーケン.A が紹介するところによると、死の床にあった老母（91 歳）は、昏睡状態から目を覚ますと、周囲で見守っていた皆にウイスキーを所望し、それを飲み干し、さらにタバコを吸い終わり「天国でまたあいましょう。バイバイ」と言って横になり、亡くなったという²¹。やや状況は異なるが、カステンバウム.R も、ウイスキーを飲み、最後まで快活に振舞って死んだ男 W.B.E の例を紹介している²²。ロス は、木から落ちて死を覚悟した農夫が、自分の死後のことを指示し、皆に別れをつけて亡くなった男の例を報告している²³。

* 妙好人の源左に関して、次のような話が伝えられている。

源左が 89 歳の高齢に達して病床にあった時、彼の友人直治もまた同じく病床にありました。しかし直治は死が近づくにつれ、不安になり、どうしたら安心して死ぬるか、それを源左に聞きにやりました。源左はいとも簡単に「ただ死にさえすればよい」と答えたといえます²⁴。

* 日野原重明は、医師になって最初（昭和 12 年）に見取った結核性腹膜炎の少女（16 歳）が、死を受容して逝ったことを感銘深く回想し、そのやせ細った少女の最後の言葉を伝えている²⁵。

「先生、お母さんには心配をかけつづけて、申し訳なく思っていますので、先生からお母さんに、よろしく伝えてください」彼女は私にこう頼み、私に向かって合掌した。私は眠ったような彼女の耳元に口を寄せて（もうすぐお母さんが来ると）大きく叫んだ。……彼女は急に気づいて茶褐色の胆汁を吐いた。そしてそのあと、二つ三つ大きく息をしてから無呼吸になった。

* 死刑囚の様子は、様々に伝えられている。拘禁症状を呈し、精神的に動揺し、看守に毒づき、独り言をつぶやき、漫画を読んでゲラゲラ笑っているなど、様々なタイプの者がいると言われる。そのなかで、人格を磨き、仏のような人間になり、自分をいびる看守をあわれみ、多くの人に感謝した後、従容として刑に処せられた人々が注目される。

* プラトンによるとソクラテスは、死刑判決を受けたときも、自死処刑（70 歳）のときも平然としていた²⁶。また、維新期の英国駐日公使館書記官ミットフォードは、「神戸事件 1968」の責任をとった滝善三郎正信（32 歳）が、一言のうめき声もあげずに切腹して果てた鬼気迫る様子を描写している²⁷。また、戦前の陸軍大臣阿南惟幾は、「一死を以って大罪を謝し奉る」と遺書を残し、義弟竹下と平然と酒を酌み交わしてから短刀で割腹し、その後の介錯を断り、自らのどを切って果てた（1887-1945：58 歳）。

これらは、死を受容しうるほどまでに自我を超越した主体が誕生していることを物語っている。いくつかのエピソードは、その姿の個性的表現ということになる。ではこのような超越を、一体どのように理解し、類型化することができるだろうか。

これに関しては、二つの先行研究が参考になる。

(1) 岸本英夫の「生死観四態」

岸本英夫によると、生死観とは「死を超えていつまでも生き続けたいという人間の欲求」に対する答えである。そこで、限りなき生命、滅びざる生命の把握の仕方という視点から多様な生死観を通観すると、それらは以下の 4 つに類型化できるという²⁸。

- 一、肉体的生命の存続を希求するもの
- 二、死後における生命の永続を信ずるもの
- 三、自己の生命を、それに代わる限りなき生命に托するもの
- 四、現実生活の中に永遠の生命を感じ得るもの（日常茶飯の生活そのま
まの中に、永遠の生命の宿るのを見出す）

岸本も言うように、一は不可能である。従って二～四が、死すべき自己を超越する三類型ということになる。

(2) 山崎高哉の「人生の成就——人間の〈最後の言葉〉に見る」

山崎高哉は、老いた人々が死の直前に残した言葉に注目する。彼はそれ

自己超越の類型

らを、「人生の意味の成就・完成を求め」「生の証を示そう」とし「超越的なものとの関りを表現しようとしたもの」という視点から次のような類型に分類した²⁹。

- 1 生物学的類型：自分の人生と夢を、配偶者や子孫に、あるいはこれを拡大した家門や家郷に託し、彼らの中に生き続けることによって自己の永遠化を図ろうとするもので、最も多い基本的なパターンである。
- 2 社会学的類型：これまで献身してきた国家・社会・人類の中に生き続けようとし、そのような集団の存続のための礎・犠牲となることで、自分の生の不滅を願う。
- 3 実存的、人格的類型：これまで献身してきた仕事（学問や文芸、愛や奉仕）などの価値の中に生き続けようとする。
- 4 宗教的類型：神仏や自然・宇宙などの聖なる価値への帰依によって自我を超える。
- 5 超越を拒否する自暴自棄的、享楽主義的類型³⁰

山崎の場合、5を除外すれば、類型は4つということになる。

岸本と山崎の類型には、視点の違いがあるが、三と123はほぼ重なりあう。

四と4は、重なりながらずれている。自己を聖なる価値（例えば宇宙、自然、法など）の微小なる顕現だと了解する点でほぼ重なり合い、その聖なる価値（例えば唯一絶対の神）への帰依とする点でズレている。前者の場合、聖なるものは自我と親和的であり、後者の場合の場合、それは自我と隔絶している。このように了解すれば、このズレは、聖なる価値の性質によって生じていることが了解される。だとすれば、これ全体が一つの類型になる。これは、聖なる価値との関係付け（顕現・帰依）による自己超越と言ってよい。すると、類型は三つということになる。

ところがこれらの類型には収まらないような、自己超越がある。それは、ソクラテスや釈尊である。

ソクラテスは、「無知」という立場に立って、死をおそれない。また釈尊の場合は、一切のものは無常であることの諦観に立って、死を淡々と受け止めていく。これらとは異なるように見えるが、中江兆民もまた、徹底した無神論・無宗教の立場に立って、死を受け止め「靈魂なるものは火なり。肉体は薪なり。薪尽きて火滅す。かくのごときのみ」と断じている。

死は不可避の現実であり、当然のことであり、ただ受け入れるだけで、死後について詮索する必要はないという立場、これは現実の理性的諦観であり、時には虚無的とさえいえるような自己超越の一類型である。

以上から、死を契機とする自己超越の類型は、ほぼ四つにまとめることができる。整理しておくこと

- A：生命（靈魂）存続型→死後は別世界に行く
- B：委託型（自己の生命を、それに代わる限りなき生命・価値に托する）
- C：聖なる価値の顕現・帰依型
- D：理性型

死の受容に見る自己超越を考える場合は、さらに以下の点を加味する必要がある。

- (1) 基本的類型が四つであるとしても、それらは血液型のように固定的なものではなく、ある型から他の型へ発展・推移している場合が多い。例えば、「死ねば無に帰するだけだ」と断じながら、「そのようにして命の樹は、私という一枚の葉を落として、悠久の歴史を刻んでいくのだ」と思っているなら、D→Bということになる。
- (2) 年齢による自己超越の変化。子供であっても、自分の死を受け入れることがある。別の世界へ行くのだと了解して晴れ晴れする子供もおれば、またこの世に生まれ変わってくると考えて安心する子供もいる。これらは子供の自己超越であるといってよい。また、老齡期の後期になると、

自己超越の類型

死と親和関係が増していくことはよく知られている。この場合は、自我の変容（脱執着化、軟化）による無理のない素直な自己超越という姿をとる。

(3) 時代の状況。どんな時代に、どんな文化の、どんな状況のなかで死に直面したかによって、自己超越は困難にもなれば容易にもなる。戦争のような状況下では、死を受け入れることは相対的に容易であろう。またアリエスの視点を借りて言えば、死は「飼いならされた死」から「タブー視される死」へと変容しており、死を受容する姿勢もまた当然変化したということになる。

(4) 死の受容に見る自己超越にも、必死になって成し遂げられ、緊張をはらんだ自己超越から、ごく自然に成し遂げられ、穏やかに安定している場合まで、いく色かのスペクトラムがある。これは、年齢の要因が大きい、それだけとはいえない。

以上を加味した場合、死の受容に見る自己超越の類型には、更にいくつかの付随的類型を想定する必要があるが生じるであろう。またその類型全体は、互いに重なり合ういくつかの円として把握するのが妥当であろう。

まとめ

以上で自己超越に関する幾つかの立場とその類型を概観した。

子供の自我の発達過程を超越と見るならば、この超越は誰にでもおこりうる。

大人の自我だけをとりあげ、この自我の限界を超えるという意味で超越を考えるならば、その超越は、幾つかの視点からこれを類型化することができる。

大人の自己超越は、真の超越と仮のそれとがあり、その間には、多くの次元がある。それらの超越は、一回で完結することもあるが、普通は幾度

もくり返される。社会的評価という点から言えば、どの自己超越にも、成功例と失敗例がある。またこの超越は、自分の力を駆使してなされる場合から、何か他のものを契機として（他力によって）なされる場合まで幾つかのスペクトラムがある。これは、無理やり自分に言い聞かせ必死の形相でなされる場合から、ごく素直になされてそのことに安らいで居られる場合までのスペクトラムと相関関係にある。そのスペクトラムを考えると、自己超越の質は年齢によって変わる可能性がある。

注

- 1 武田清子「自己超越の発想」近代日本思想史講座3 所収筑摩書房 昭和三五年
- 2 竹内良知『西田幾多郎』東京大学出版会 昭和四五年第五章
- 3 竹内整一『自己超越の思想』ペリカン社。竹内整一は、明治期に誕生してくる近代自己が、自らを近代自己として確立しようとして様々な動揺・煩悶を経たあげくに、ついにそれをなしえぬ自覚に至った自己が、そのような自分自身の超越を試みたケースをいくつも取り上げて分析している。
- 4 清沢満之全集第七巻、三八〇ページ 法蔵館 昭和三〇年
- 5 竹内整一、前掲書 119
- 6 教判とも言われる。仏教全体の分類で、日本でもいくつかの教判があるが、自己超越という視点からみて興味深いのが、親鸞のそれである
- 7 親鸞『教行信証』後序
- 8 唯円『歎異抄』
- 9 親鸞『愚禿鈔』
- 10 大谷派『真宗聖典』三四一頁。本願寺派『浄土真宗聖典』三九四頁
- 11 『一念多念文意』大谷派『真宗聖典』五四一頁
- 12 メタ認知という言葉は、知的作業を行っている有様をさらに知的に認識するという意味で用いられる。ここでは、自我の有様を観察している自分を、自我ともしも丸ごと認知するという意味で用いている。
- 13 両重因縁録『教行信証』行巻 大谷派『真宗聖典』一九〇頁
- 14 ウィルバーの多くの本が翻訳されている。ここでは主に、吉福伸逸他訳『アートマン・プロジェクト』春秋社、1986 による。
- 15 Stern D.N. 1985 The interpersonal world of the infant 小此木・丸田（監訳）『乳児の対人世界（理論編）』岩崎学術出版社

- 16 Neisser, U., Criterion for an ecological self, In P. Rochat (ed), The self in infancy: Theory and research, Elsevier, 1995
- 17 E キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』読売新聞社
- 18 例えば A デーケン^アは、六段階をあげている。『死とどう向き合うか』NHK 出版 一九九六
- 19 出展箇所は不明。小澤勲『痴呆を生きるということ』岩波新書 二〇〇三年 二一三頁
- 20 岡本五十雄『再び生きていくということ』四六頁 近代文藝社 一九九六
- 21 デーケン.A『死とどう向き合うか』p. 180 NHK ライブラリー 1996
- 22 ロバート・カステンバウム『死ぬ瞬間の心理』p. 37 西村書店
- 23 ロス.E.K『死ぬ瞬間』読売新聞社 p. 17
- 24 寿岳文^{じゅがくぶんしょう}章『柳宗悦妙好人論集』
- 25 日野原重明『死をどう生きたか』p. 9 中公新書。特攻隊員も、親への感謝の言葉を遺書にしたためたものは多い。ロスもこの種の例をいくつか挙げている。
- 26 Plato: Apologia Phaedo.
- 27 新渡戸稲造『武士道』p. 113 三笠書房参照
- 28 岸本英夫「生死観四態」昭和 23 年。『死を見つめる心』講談社、昭和 39 年所収
- 29 山崎高哉「人生の成就」岡田渥美篇『老いと死』玉川大学出版部一九九四年所収。引用されている「最後の言葉」の一端を紹介した。山田風太郎『人間臨終図巻』3 巻 1987 徳間書店は、十代半ばから百歳までの臨終者の様子を収録しているが、出典が不明で、他の資料と食い違う点がある。
- 30 これらは更に(1)無念、絶望の人生への決別、(2)享楽の人生を賛美する、(3)死の習俗や制度を拒否するような言葉を残して果てる、の 3 つに分類されている。

(本学教授・教育哲学)